

【SR-9 定性的システマティックレビュー】

CQ	10	EVによる皮膚障害・炎症の悪化・進行を防ぐために局所療法として冷罨法（冷却）または温罨法（加温）は推奨されるか
P	がん薬物療法を受ける患者 抗がん剤によるEVが起こった患者 抗がん薬による静脈炎がある患者	
I	冷罨法（冷却）する、または温罨法（加温）する	
C	冷罨法（冷却）しない、または温罨法（加温）しない	
臨床的文脈	治療	

01	漏出部位の炎症（皮膚炎・血管炎）の減少	
非直接性のまとめ	冷罨法単独による介入ではなく、ステロイド、デクスラゾキサソンの薬剤と併用した介入によるものであるため、直接性は低いと考える。	
バイアスリスクのまとめ	冷却方法の詳細が不明であり、介入実施者によって差が生じる可能性があること、冷罨法以外の医療的介入もあることから、アウトカムへの影響は否定できないと考える。	
非一貫性その他のまとめ	冷罨法を併用した介入による結果として、炎症の減少が見られたケースだけでなく、再燃したケースもあり、一貫性がないと考える。	
コメント	温罨法に関する報告は一切なく、冷罨法に関する報告も前向き研究はないため、有用性の評価が難しい。また、冷罨法単独の介入に関する報告はない。	

02	漏出部位の疼痛・灼熱感の減少
非直接性のまとめ	冷罨法単独による介入ではなく、ステロイド、デクストラゾキサンの薬剤と併用した介入によるものであるため、直接性は低いと考える。
バイアスリスクのまとめ	冷却方法の詳細が不明であり、介入実施者によって差が生じる可能性があること、冷罨法以外の医療的介入もあることから、アウトカムへの影響は否定できないと考える。
非一貫性その他のまとめ	冷罨法を併用した介入による結果として、疼痛や灼熱感の減少が見られた報告もあるが、詳細は不明なケースもあり、一貫性がないと考える。
コメント	温罨法に関する報告は一切なく、冷罨法に関する報告も前向き研究はないため、有用性の評価が難しい。また、冷罨法単独の介入に関する報告はない。

03	症状回復までの日数
非直接性のまとめ	冷罨法単独による介入ではなく、ステロイド、デクストラゾキサンの薬剤と併用した介入によるものであるため、直接性は低いと考える。
バイアスリスクのまとめ	冷却方法の詳細が不明であり、介入実施者によって差が生じる可能性があること、冷罨法以外の医療的介入もあることから、アウトカムへの影響は否定できないと考える。
非一貫性その他のまとめ	冷罨法を併用した介入による結果として、症状回復までの日数にばらつきがあり、一貫性がないと考える。
コメント	温罨法に関する報告は一切なく、冷罨法に関する報告も前向き研究はないため、有用性の評価が難しい。また、冷罨法単独の介入に関する報告はない。

04	皮膚損傷の減少
非直接性のまとめ	冷電法単独による介入ではなく、ステロイド、デクスラゾキサンの薬剤と併用した介入によるものであるため、直接性は低いと考える。
バイアスリスクのまとめ	冷却方法の詳細が不明であり、介入実施者によって差が生じる可能性があること、冷電法以外の医療的介入もあることから、アウトカムへの影響は否定できないと考える。
非一貫性その他のまとめ	冷電法を併用した介入による結果として、皮膚の硬結、色素沈着、壊死が見られたケースもあり、一貫性がないと考える。
コメント	温電法に関する報告は一切なく、冷電法に関する報告も前向き研究はないため、有用性の評価が難しい。また、冷電法単独の介入に関する報告はない。

05	組織の障害（潰瘍形成）の減少
非直接性のまとめ	冷電法単独による介入ではなく、ステロイド、デクスラゾキサンの薬剤と併用した介入によるものであるため、直接性は低いと考える。
バイアスリスクのまとめ	冷却方法の詳細が不明であり、介入実施者によって差が生じる可能性があること、冷電法以外の医療的介入もあることから、アウトカムへの影響は否定できないと考える。
非一貫性その他のまとめ	潰瘍形成があったケースが2事例と少なく、冷電法を併用した介入後の結果として、減少までの期間が異なるため、結果に一貫性がないと考える。
コメント	温電法に関する報告は一切なく、冷電法に関する報告も前向き研究はないため、有用性の評価が難しい。また、冷電法単独の介入に関する報告はない。

06	低温・高温による皮膚障害（熱傷）の発生
非直接性のまとめ	
バイアスリスクのまとめ	
非一貫性その他のまとめ	
コメント	該当文献なし

07	炎症反応の増悪（悪化）
非直接性のまとめ	冷罨法単独による介入ではなく、ステロイド、デクスラゾキサンの薬剤と併用した介入によるものであるため、直接性は低いと考える。
バイアスリスクのまとめ	冷却方法の詳細が不明であり、介入実施者によって差が生じる可能性があること、冷罨法以外の医療的介入もあることから、アウトカムへの影響は否定できないと考える。
非一貫性その他のまとめ	冷罨法を併用した介入による結果として、炎症の再燃が見られたケースがあるが、炎症が減少しているケースも多く、結果の一貫性がないと考える。
コメント	温罨法に関する報告は一切なく、冷罨法に関する報告も前向き研究はないため、有用性の評価が難しい。また、冷罨法単独の介入に関する報告はない。